

229 結合型エストロゲン併用によるクロミフェン単独刺激体外受精の検討

名古屋、徳川レディスクリニック
稲垣資郎

〔目的〕GnRHa-hMG刺激による体外受精の普及はめざましく、有益な成果をもたらしているが、OHSS、多胎妊娠、頻回な通院による経済的、精神的負担等の問題が指摘されている。一方、クロミフェン単独では内膜の皮薄化による妊娠率の低下が懸念される。今回、結合型エストロゲンを早期から投与しクロミフェン単独刺激による体外受精（以下C-IVF）を行い良好な結果を得たので報告する。〔方法〕対象となった症例は平成8年3月より当院にて施行された男性因子不妊を除く不妊症症例86周期49例で月経開始3日目より結合型エストロゲン1.25mg経口投与し5日目よりクロミフェン50mgを5日間投与、月経開始11日目より卵胞を計測、主席卵胞が16ミリ以上になった時点でhCG5,000単位の筋注を行い、38時間後に採卵した。尚、卵胞発育不良の際はクロミッドの2段投与を行った。〔成績〕同時期に行われたGnRHa-hMG刺激の体外受精（以下Long-IVF）34周期28例と比較検討をした。結果はC-IVF:Long-IVFで平均 peak E2 622:1525

平均採卵数1.4:6.5 平均胚移植数1.3:2.4 周期あたりの平均通院日数7.1:18.0 周期あたりの妊娠率27.9%:29.4%であり、妊娠率以外に有意差を認めた。OHSSはlong-IVFのみ2例に認め双胎妊娠はC-IVFで1例、long-IVFで2例認めた。C-IVFの卵子は卵丘細胞が小さく卵割時のフラクメンテーションが少ない印象を受けた。〔結論〕この方法は、OHSSの危険性が少なく通院日数も半減し、穿刺卵胞数の減少に伴い採卵時の危険性も減少する一方で妊娠率に有意差は無く、安全で有用な方法と考えられた。

230 媒精時間の短縮が受精率、分割卵の質におよぼす効果

北里大
前原大介、川内博人、鋤持 稔、石川雅一、飯野譲二、石井尊雄、中居光生、西島正博

【目的】体外受精・胚移植（IVF-ET）では卵と精子の媒精時間は通常16～18時間に設定されている。本研究はこの媒精時間の短縮が卵の受精・分割率および受精卵の形態評価に与える影響を検討することを目的とした。

【方法】対象は当科でIVF-ETを実施した11症例11周期で、本研究に対して本人および配偶者の同意を得た。採取した未受精卵は顆粒膜細胞の付着形態から推定した成熟度が偏らないように各症例毎にはほぼ同数に2分し、一方は媒精時間を通常の16～18時間とし（L群）他方は媒精を2時間で終了させ、精子を含まない新たな培養液に卵を移した（S群）。媒精精子数等他の培養条件はすべて一定とし、両群とも媒精後16～18時間で受精の有無を確認した後さらに培養を続け、44～48時間後に分割の状態を観察した。受精卵の形態の評価はVeckの分類に従い、G I およびG IIを形態良好胚とした。

【成績】対象の平均年齢は35.3歳、hMG平均投与量は2161単位で、採卵数は4～18（平均10.6）、計117の卵を採取した。媒精時の精子運動率は78.6～99.6%（平均92.0%）だった。平均受精率、分割率は各々L群82.1%、95.9%、S群89.3%、89.5%で両群の間に有意差は認めなかった（paired t test、受精率 $p=0.18$ 、分割率 $p=0.29$ ）。形態良好胚はL群で24/46（52.1%）、S群で35/48（82.9%）にみられ、S群で有意に高率だった（ $\chi^2=4.3$ 、 $P=0.04$ ）。

【結論】媒精時の精子運動率が良好な症例の体外受精においては、媒精時間の短縮は受精率、分割率を低下させず、形態良好胚の割合が高くなることから、その有用性が示唆された。